

## 明治前期日本人の朝鮮観

### 日清戦争にいたる筋書き

ある歴史の過程を叙述する場合には、これまでそれは本として書かれてきた。つまり、それはふつうページをめくるように順番に読まれるものとして考えられている。第二に、物語のストーリーは、ただ一つ、それ以外には選択の余地がないものとして、読者に与えられる。これは、現実の歴史を、物語叙述の形式でしか書物においては語ることが出来ないということからくる重大な制約ではないだろうか。

歴史の過程の中では、ある一つの単純なストーリーで話が展開しているように見えるときもあれば、複数の筋書きの共存という形で理解したほうが良い場合もある。日清戦争に至る明治前半期における、日本の朝鮮、中国との関わりかたはまさに後者の形で理解すべきものだと、筆者は考えるものである。

### 上垣外憲一

日清戦争にいたる日本の朝鮮に対する政策を、単純な一本のストーリーで叙述すると次のようになる。

日本は明治維新に際して、政体の変更を朝鮮政府に通知し、新たな交際を迫った。これに対して主として名分論から、手紙の文言が日本、朝鮮の対等を破るものとして、朝鮮側は国交を拒否した。これを無礼として日本政府内に征韓論がおこるが、岩倉、木戸などの反対で、これは実現しない。しかし日本は朝鮮に対して一八七六年に軍艦を派遣して砲艦外交を行い、朝鮮を力づくで開国させる。さらに一八八二年の壬午軍乱において、日本の世論は沸き、日本政府は日本の軍備を大幅に拡張することを計画し始める。福沢諭吉は一八八四年「脱亜入欧論」において東洋諸国の自発的開化は不可能であるとして、西洋諸国が東洋人を処分するように、日本もこれらに対するべきである、と説いた。政府、軍部はこの間着々と軍備を整

え、東学党の乱を機に朝鮮に軍を派遣、清国軍と交戦状態に入り、日清戦争が始まる。

これ以外の日本の動きはそれでは、そのそれぞれの時点において、論ずるにあたらないものであつたらうか？ 私はそうは考えないのである。

さらに、日清戦争なり、日韓併合なりはたしかに重大事件であつたから、それを終点として歴史を叙述することは間違ひではないが、もしもすべての明治における日韓関係の歴史叙述がこの二つを終点として行われるならば、それは一種の歴史に対する偏見を生むであらう。この二つだけを目標として日韓関係が存在していたわけではないからである。

私は、上にあげた歴史のあらずじが、現在もつとも普通に行われていると仮定して、そうではない可能性に重点をおいて、これから先の話を進めたい。

### それ以外の対韓意見

明治十年代の言論に詳しく目を通していくと、日本人の朝鮮問題に対する考え方は、意外に多様性があり、単に侵略の対象、あるいは清国との覇権争奪の場としてしかこれを見ないといったものとはかなり隔たりがあるように思われるのである。

その代表と思われる言説は、やはり中江兆民の「三醉人経綸問答」(二八八七、明治二十年)であろう。ここで特徴的なのは、中

江兆民が、三人の男が酒を飲みながら、東洋の情勢と日本をとるべき政策について議論するという叙述形式をとっていることである。

そうして兆民はこの三人の対照的な議論のうち、どの議論が正しいということを示さない。日本のとるべき道はさまざまな選択の可能性がある、ということとその叙述の形式から示しているのである。

こうした叙述形式が必ずしも兆民だけに特徴的でなかったことは、例えば日清戦争の時の外務大臣陸奥宗光は、中国、朝鮮にきわめて冷酷あるいは強硬な処理策の持ち主であったが、その著『蹇々録』において、さまざまな状況において日本国内に存在した異なる意見を並列的に書き出している部分がいくつもあることから知られる。

陸奥宗光は、日清戦争後の朝鮮に対する日本の方策を四箇条とし、その得失をそれぞれ挙げている。即ち、(1)朝鮮をまったく自主独立の邦として干渉を行わず、その運命にまかせること。(2)朝鮮を保護国とすること。(3)朝鮮領土の安全は日清両国がこれを保証する。(4)朝鮮をベルギーやスイスのような中立国にするために、日本が欧米諸国と清国に提案を行う。

(4)について言えば、陸奥はもちろんこれを「大早計」であると評しているが、個人としてこうした意見を述べるものがいたことを紹介している。

また、日本政府にとっても、言論界の代表者である福沢諭吉にとっても、朝鮮、清国に強硬策、軍事対立路線をとらせる原因となった壬午軍乱については、新聞報道が盛んになされたばかりか、この報道をまとめた本も十以上出されている。新聞報道で用いられた用語の解説字典、「朝鮮事変新聞字引」が出された程で、当時の日本人の朝鮮での事件に対する関心の大きさがうかがえる。その他の新聞報道の論調は、もちろん軍乱を朝鮮の暴挙とすみやかな軍事行動をよしとするものもあるが、意外に冷静に朝鮮での事件の経過の事実関係を追う姿勢を見せているのである。最初にあげたさまざまな観点、さまざまな方策という点からいうならば、「絵入 朝鮮変報録」の編集方針は興味深いものである。「絵入」という点から見ればこの「朝鮮変報録」は大衆向けを基としたものであろう。ところでこの「変報録」はいくつかの新聞の対照的な論調を並列的に載せて、読者の判断に任ずという書き方をしている。ここに収録された「東京日日新聞」の論説の一節はつぎのようなものである。

かの英仏諸国が開港の初め我が国に向かつて行ひし所を願想すれば即ち彼が東洋に処するの手段にて兎角に兵威を以て我を恐嚇し我れに強迫るを得意としたりとはいひながらその実は軽々しく兵を動かさず或いは浪士に公使館を襲はれ或いは攘夷家に暗殺せられたる等種々の変に出逢も成るべくは平和の結局を望みて幕府に談判

を開き最早幕府の手を経ては平和の満足を得るをあたはざりしといふに至りて後に兵を動かし止を得ざるに出でたるに非ずや鹿児島下の関の戦争の如き即ち是なり恐嚇強迫を以て利己を専はらとする欧州諸国の我国に於けるも猶且然り況んや我が朝鮮におけるをやその通交の目的は利己に<sup>(1)</sup>あらずして共利にありその手段は恐嚇にあらずして威信にあるをや

(原文の旧字体は新字に改めた。変体仮名もひらがなに変更、以下の引用も同様である。)

これは幕末期の英仏の対日外交戦略が一見強硬な態度を見せても、暗殺、焼き討ちにあっても出来るだけ平和的な交渉によって解決することを第一とした例を引いて、日本人が殺されたことにうろたえて、事実関係をまずよく確かめることを求め、前後の策なしに軍事的な解決を計ることを戒めたものである。

この「変報録」では続いてそれとは全く反対の論として「朝野新聞」の強硬論を紹介している。

そもそも朝鮮人が外国と交通するを好まず長く攘夷鎖港の旧弊を固守せんとするは一朝一夕の故にあらず而して我が日本人を憎むこと殆ど鬼域の如きものあり幸はいに当今在位の国王と一二聡明の臣

僚ありて兩國の交誼を全ふし開國の英断をなすといへど上には守旧の魁首たる大院君あり下には数十万の頑迷なる人民あり早晚斯の如變動の意外に発することあらんとは我輩の常に危ぶみ居たる所なりき今やかの暴徒は公然兵を挙げ我が公使館に放火し我が国旗に発砲し我が官吏を殺傷せりその罪決して宥すべからず……（中略）……縦令暴徒の強迫に出るにもせよ彼の君相之を黙許して我が公使館を攻撃せしめ我が官吏を殺傷せしめ自己堅くその宮門を閉ざしてその入るを拒み知れども知らぬ振して暴徒の為に任せしならばその罪の帰するところ自づから在るあり豈之に臨むに問罪の師を以てせざるを得んや<sup>(2)</sup>

これは強硬出兵論であるが、事件の真相を確かめるべきだとしているのは、日日新聞の場合と同じであり、「一二聡明の臣僚ありて兩國の交誼を全ふし」といった点を認めている点では、例えば日清戦争の頃の朝鮮に対する全面的な罵倒、否定とは一線を画する部分があるように思われる。

いずれにしても、最も興味深いのはこの「変報録」が、全く相反する二つの主張をそのままの中に紹介している点であって、物事について頭から決めつけずに、いくつかの観点、いくつかの方策が有り得ることをその形式によって示しているのである。

こうして見ると「三酔人経綸問答」の対話という思想表出の形式

が、必ずしも中江兆民という一種の天才的、先進的な思想家の独特なスタイルとも言えない、ということになるのである。兆民は明治二十年、一八八七年の時点において一方に西洋諸国の東洋侵略の危機に対するに、日本もまた科学、産業を振興して武備を整えて東洋の国々に覇を唱えようという「豪傑君」と、外国の侵略に対してはあくまでもその非理を説いて、容れられずに実際に侵略にあつたら戦わずに死ぬのみという「洋学紳士」の非抵抗、非暴力を二つの極論として提出し、その中間の南海先生の論を現実的なものとして提出しているかのように読まれる。

つまり外国の侵略が自国に及ぶときは武器をとって徹底的に抵抗するが、自ら戦争を求めて海外に積極的に出て行くことはしない、という立場である。こうした観点からすれば当時朝鮮をめぐる対立関係にあると認識されていた清国ともあえて争いを求めるようなことはしない、ということである。

但、所謂大邦若し果て亜細亞に在るときは、これ宜しく相共に結んで兄弟国と為り、緩急相救ふて、以て各々自ら援ふ可きなり。妄りに干戈を動かし、軽々しく隣敵を挑し無辜の民の命を弾丸に殞さしむるが如きは尤も計にあらざるなり。<sup>(3)</sup>

外交については、つとめて和を求め、武力に訴えないことを宗と



すべきであるという。

外交の旨趣に至りては、務めて好和を主とし、国体を毀損するにいたらざるよりは、決して威を張り武を宣ぶることを為すこと無く、言論、出版、諸種の規條は漸次にこれを寛にし、教育の務、工商の業は、漸次に之を張る、等なり<sup>4</sup>。

二人の客は之を聞いて、普段は奇抜な議論を戦わす先生がこのような子供でも知っているようなことを言うとは、といえは先生は之に對して、居ずまいを正し、「国家百年の大計を論ずるような場合には、奇抜を看板にし、新しさを売り物にして痛快がるというようなことが、どうして出来ましょうか」と言うのである。まさしくこの平凡な策を日本が採用していれば、その後のアジアの歴史は大きく変わっていたであろう。しかし同時に兆民が三つの日本がとり得る方策として示したところのものは、洋学紳士の説はともかく、後の二つは、先の「東京日日新聞」の論説が示すように、当時の日本にとつては現実的な選択肢として存在していたのである。兆民という存在もその後の日本の進路や言論から見れば特異な例外者のように見えるであろうが、三年後の明治二十三年（一八九〇）、憲法が發布され、第一回の衆議員選挙が行われたときも大阪第四区から立候補して当選しているので、実際の政治においても活躍しうる可能

性を持っていた時期の発言なのである。

日清戦争を目指して政府が提出する軍備拡張予算を議会が次々に否決したのも、兆民の「三酔人経綸問答」の南海先生のような意見が民間に有力であったからこそである。明治十年代の言論界はたしかに福沢諭吉の「時事新報」によって代表されていたといえるかも知れないが、しかし福沢とは別の朝鮮に対しても穏健な考え方もまた新聞紙上で公表されていたことを考え合わせるべきである。

そのような文脈において福沢の論説も読み合わせないと、重大な読み間違いをする危険もあるのである。

#### 福沢諭吉の論説について

福沢諭吉が壬午軍乱（一八八二年七月）に先立つ時期（三月）に「時事新報」紙上に「圧政もまた愉快なるかな」という論説を発表して、圧政を受ける側は大変だが、これを行う側にまわれれば、これほど愉快なことはない、としてアジアに対して高圧的な態度で臨むことを説いたと言われる。しかしその真意がどこにあったかを今日判断するには慎重でなければならぬ。たとえばさきの東京日日新聞の論を読んでも、英国、フランスなどが日本に強硬な態度、武力使用をちらつかせたとしても、実際にはなるべく平和的な解決を第一としていたことを挙げていることを参照すれば、福沢がただちに朝鮮に対して侵略的な態度に変化したとは決めつけられないのであ

る。

彼が早い時期に出版して幕末期のベストセラーになった「西洋事情」のなかで福沢は国際関係のあり方についてこう述べている。個人から構成される社会では法律があり、司法制度があつて、秩序が保たれている。これに対して国際社会では国際公法と言うものがあるにもかかわらず、これを強制的に守らせる手段というものがない。したがつて国際社会の安全を確保する第二の方法として勢力均衡による安定という策が用いられている。この勢力均衡策が機能しなくなつたときに戦争が起こるのである。

福沢も国際公法によつて保たれる国際秩序が理想であると考えていたことは、「西洋事情」の時点では明らかであるが、その国際秩序に対する信頼感が崩壊したときにどのように対処するか、ということがまさしく明治十年代の後半の日本の選択を迫られた問題であつた。この選択は海外の情勢が変化するにつれて、変動する。世界秩序が国際公法によつて保たれているか、勢力均衡によつて保たれているか、という点の認識が、国際情勢の変化によつて、変動するからである。

さて、福沢の「圧政もまた愉快なるかな」の論調を理解するためには、福沢が「時事新報」紙上に、戯文調でしばしば自己の論を述べていたこともまた、参考にしなければいけない。福沢の「圧政もまた愉快なるかな」には戯文の調子もまた認められるからである。

我帝国日本にも幾億万円の貿易を行ふて、幾百千艘の軍艦を備え、日章の旗旗を支那印度の海面に翻して、遠くは西洋の諸港にも出入し、大いに国威を輝かすの勢いを得たらんには支那人などを御すること彼の英人の拳動に等しきのみならず、現に其英人をも奴隸のごとくに圧制して其手足を束縛せんものと、血気の獸心、おのずから禁ずること能はざりき。<sup>(5)</sup>

まことに正直な感想と言ふべきだろうが、圧政も愉快だと感ずるその心が「血気の獸心」、つまり倫理的に見て、よろしからぬものである、ということもまた、福沢は示しているのである。ここでは福沢が、冗談と本音を半々ない交ぜにしている、ととるべきであろう。日本の国論が当時二分していたように、福沢の胸の中にも、いささか単純に日本の国威が他国を圧して日本が世界の盟主となることを願望する気持ちと、もっと世界各国が調和的に共存する理想とが共存していたと見るべきである。この時期の福沢の論調から、以下に、穩健論と読むことのできる文をいくつか引いてみる。

吾人は固より支那人に対して宿怨あるに非ず。況んや朝鮮国に対するに於てをや。曾て一毫の怨みなきのみならず、近時世界の形勢に於て止むを得ざる場合より、その開国締盟を促したりとは云ひな

がら、彼の国情の艱難を察して力の及ぶだけは平和一偏の旨を以て、これを誘導し、また保護せんことを欲するのみ。(「東洋の政略果たして如何せん」)<sup>(6)</sup>

もちろん福沢諭吉はこれに続く論説で、清国との交戦の可能性を想定して、軍備の拡張を主張しているのであるが、福沢の心の一方には「力の及ぶだけは平和一偏の旨を以て」という考えがあることも見落とすべきではない。福沢は清国、朝鮮に対してまったく「退歩的」消極的な方策をとることも、可能性としては示している。

「我政府が退守の主義に決するときは支那人に何ほどの胆力あるも、武を以て我れに敵する能わざるや明らかなり」<sup>(7)</sup>

朝鮮の問題に対して、武力を用いて積極的になれるか、退いて自重するかは、「三酔人経綸問答」が典型的に示すように明治十年代の日本にとってはまさに選択の問題だったのである。

### 三十年前の日本

この時期の日本の朝鮮に対する論調のうち穏健なものを取り上げると、そこには、日本もかつては鎖国、攘夷の時は、外国の事を忌み嫌い、殺傷したものではないか、という言い方がしばしば見られる。

たとえば、先の福沢諭吉自身、明治十四年(一八八二)朝鮮から

紳士遊覧団が派遣されその中から兪吉濬、柳正秀の二名が福沢の慶應義塾に入学するが、その時のことを福沢は当時の書簡に次のように書いている。

本月初旬朝鮮人数名日本の事情観察の為渡来、其中壯年二名本塾に入社いたし、二名共先ず拙宅にさし置、やさしく誘導致し遣居候。誠に二十余年前自分の事を思へば同情相憐れむの念なきを得不得、朝鮮人が外国留学の頭初、本塾も外人を入るるの発端、実に奇遇と可申、右を御縁として朝鮮人は貴賤となく毎度拙宅に來訪、其咄を聞けば、他なし三十年前の日本なり。何卒今後は良く附合開らける様に致度事に御座候。(明治十四年六月十七日、小泉信吉、日原昌造宛)<sup>(8)</sup>

ここでは、福沢は朝鮮から留学してきた二人の青年に、二十数年前の自分を重ね合わせてみて、大いに同情の念を抱いたと言っている。「やさしく」といった形容詞は福沢の文章にほとんど見ることができないものだが、朝鮮の留学生とその母国の状況にたいして「他なし三十年前の日本なり」と日本の方が明らかに進んでいる、という優越意識と同時に自分のかつて経験した苦しい状況とそれはおなじだ、という共感の念もまたあついたのである。

こうした、今の朝鮮の状況は二十年、三十年前の日本と同じでは

ないか、という言い方のもう一つの例を見てみよう。明治九年（一八七六）五月江華島条約の結ばれた後、朝鮮政府が日本に金綺秀を正使とする修信使を派遣するが、朝鮮使節はまったく古風の服装で東京に現れたのだった。文明開化の号令のもとに官員の服を西洋式に改めていた日本人から見ると、これはいかにも時代遅れに映ったようで、これを蔑視する巷の会話も多かった様である。しかしこのような見方を批判する記事もまた、当時の日本の新聞には現れた。

明治九年五月二十九日、朝鮮国正使礼曹参議正三品金綺秀以下八十人、我が東京に到着したり。府下の人民はこの行列を観るがために群集し、通衢をして立錫の地なきに至らしむ。観者は韓客の衣服風俗の日本人の目に新奇なるにより、或はその陋を嗤い或はその迂を嘲り、凌侮蔑視至らざるなし。吾輩はこの間にあり、衆人とその思想を同じうするあたわず、ひとり天を仰いで浩嘆し、声を吞んで痛哭したり。（中略）

追憶すれば僅かに十余年、我が邦は東洋に孤立して頑然固守、外国交際の何ものたるを知らざりき。たまたま米国のメコモンドル・ペリリ氏のために脅迫せられ、安政六年始めて各国通商の道を開き、その翌年幕府は条約交換のために、新見伊勢守以下、およそ百余人を米国の首府華盛頓に派遣したり。この時にあたり我が使節の服飾風俗は果たして如何なりしぞ。結髪なり、帯刀なり、羽袴なり、行

列なり。吾輩は当時米国刊行の絵入新聞において、その事を明載せしを秘蔵せり。今日に於てこれを一閱するごとに、未だかつて浩嘆悲痛し、これがために赧顔汗背せずんばあらざるなり。いわんや安政六年の条約は、本年江華島の条約といくばくの優劣がある。馬関の償金は江華の間罪といくばくの差異がある。彼を思い、これを想えば、今日傲然自負して韓人の風采を嘲笑するは、いづくんぞ内に顧みて忸怩たらざるを得んや。（後略）<sup>9)</sup>

ここでは、日本の江華島砲撃は一八五三年、アメリカのペリー艦隊が日本に強引に開国を迫った時と、長州が英国艦隊と交戦して惨敗し、償金を支払って講和したときに、比されている。福沢が「三十年前の日本」といっているのもほその時点を指している。しかしその時攘夷論で大荒れに荒れた日本も、十五年後の明治維新に際しては、すっぱりと鎖国を棄てて文明開化路線を急速に走り出すのであるから、福沢のように朝鮮もまた将来日本のように「開ける」事を予想したのも当然だった。また日本とアメリカの関係のように、日韓関係が進む、或いは日英の関係のように進む、と予想されたのだった。明治十五年三月に福沢が「時事新報」に「朝鮮の交際を論ず」と題して書いた論説の中で次のように言っている。

我国に始めて和親貿易の条約を結びたるものは亜米利加にして、開国の初より旧幕政府末年に至るまでは、常に交際の首座を占め、維新の際に英国の人が聊か日本の国事に尽力したるを以て、その勢或は英人に移りたるが如くなるも、今日に在りて我国民一般の視る所にては、亜国人を重んじて、亜人も亦我国に親しむこと、自から他国人に異なる所あるが如し。左れば我日本国が朝鮮国に対する関係は、亜米利加国が日本国に対するのと一様の関係なりとして視る可きものなり。<sup>(10)</sup>

このように、福沢は日本と朝鮮の関係は、日本とアメリカの関係のようになるだろうと予測したのである。文明開化の時期には日本からアメリカに留学生が送られ、また北海道開拓について、アメリカから指導者が来るなど、日本の開化にアメリカが果たした役割を日本が朝鮮で演ずるだろう、と福沢は期待したので。ともあれ朝鮮の開化党とも深い関わりを持った福沢が、一八八〇年前後の朝鮮を日本人が、明治維新直前の日本と同じもののように思い込んでいた、ということ、その時点で確認した言葉として、興味深いものがある。そうして、大規模な紳士遊覧団が日本に送られ、慶応義塾に朝鮮の留学生が入学した時、福沢は自分の予測が実現しつつあるという、一種得意の気分を感じていた。従って、このまま日本の主導によって朝鮮の開化が進むとした福沢の予測が、明治十七年（一八八

四）の甲申政変で潰えさったと見えたととき、福沢の失望は大きかったのである。

福沢は明治三十一年に書いた「対韓の方略」と題する論説の中で日本人が、当時の韓国の政情を日本の明治維新の直前の模様に近いものと考えて、その経験を韓国に應用すればうまく行くと考えたのは誤りだったとして、次のように言っている。

……日清戦争の当時より我国人が所謂弊政の改革を彼の政府に勸告して、内閣の組織を改め、法律及び裁判の法を定め、租税の徴収法を改正する等、形の如く日本同様の改革を行はしめんとしたるは、即ち文明主義に熟したる失策にて、其結果は彼らをしてますます日本を厭ふの考を起こさしめたるに過ぎざるのみ。そもそも朝鮮には自から朝鮮固有の習慣あり。その習慣は一朝にして容易に改む可きにあらず。（「対韓の方針」時事新報 明治三十一年四月二十八日）<sup>(11)</sup>

十五年間、福沢は韓国に深い関心を持って、その国の開化を促進しようといろいろと働きかけては見たが、結局は日本と韓国は事情が違うので、外から働きかけての韓国の変革は大変難しいという単純な結論にたどり着いたのだった。

## 義侠心に熱したが

福沢は日清戦争に際して朝鮮の改革に関してさまざまな論説を書き、戦争後の改革に大きな期待を再び寄せた。それが一年もしない内に王室の内紛の報道に接して、朝鮮は少しも変わっていないと、また失望する。さらに一八九六年十一月の国王の「俄館播遷」で日本の影響力が排除されると、すっかり失望して明治十四年（一八八一）以来の朝鮮に対する期待と失望を先に引用した同じ記事に次のように記すのである。

先ず朝鮮の問題よりせんに、我国従来の対韓略を見るに、一進一退、その結果はなほだ妙ならず、遂に今日の有様に及びたる始末は世人の現に目撃したる所、別に記すまでもなければ、我輩の所見を以てすれば、其失策は二個の原因に帰せざるを得ず。即ち我国人が他に対して義侠心に熱したると文明主義に熱したると、此二つの熱心こそ慥に失策の原因なれ。（中略）

……或は少女が独行の途中、乱暴者に出逢ふて將に苦しめられんとしたる処に、偶然侠客の爲めに救はれて危難を免れたるが爲め、其親方義侠に感じて終身恩を忘れざるなどの談は、昔しの小説本等に毎度見る所にして、義侠心の効能は此辺に存することなれども、国と国との關係に斯る効能は見る可らず。此方にては大に義侠を熱

するも、先方に於ては毫も感ぜざるのみか、却てうるさしとて之を厭ふ時は如何すべきや。無益の婆心は止めにすれば差支へなければも、其処が人間の感情にて、所謂可愛いさ余りて憎さ百倍の喩に漏れず……本を尋ぬれば畢竟漫に熱したる此方の失策にて……左れば今後朝鮮に対する義侠の念は一切断念すること肝要なり。（対韓の方針）

日本は義侠心によつて朝鮮のために良かれと熱心に働いたのに、朝鮮の側では少しもそれを恩に感ずるところか、ますますこちらを厭うようである。もともと国と国との間に昔の小説にあるような義侠心などはありえないので、止めにしてしまえ、という。しかし、そこは人間の感情であるから、「可愛さ余りて憎さ百倍」という気持ちに日本人がなるのも無理からぬところがあるという。

日清戦争についていえば、陸奥宗光の『蹇々録』に、日清戦争の時の日本人の言動を記して、次のように評しているのは良く知られている。

……わが国朝野の議論実に翕然一致し、その言うところを聴くに、おおむね、朝鮮はわが隣邦なり、我国は多少の艱難に際会するも隣邦の友誼に対しこれを扶助するは義侠国たる帝国としてこれを避くべからず、といわざるなく……この一種の外交問題をもつてあたか



も政治的必要よりも道義的必要より出たるものごとき見解を下し  
たり。<sup>(12)</sup>

陸奥宗光自身は、この戦争を純然たる国益と国益の衝突ととらえていたのだが、それだからこそ、逆に日本人が隣邦の友誼に対して義侠心から「強を抑え弱を助く仁義の師を起こす」ものと思つて、たという証言に信憑性がある、と言える。これは政府の宣伝に躍らされた部分もあるであろうが、まだこの時点で日本人は朝鮮を隣邦として共感をもてる状態であつたことも事実として認めて良いだろう。福沢は先に掲げた評論に於いて、政府にあつては陸奥宗光に代表されるような、冷徹な国家利益の計算から戦争を遂行したということも承知しながら、一般国民は「外より眺めて全く義侠の為に戦ふものと認め、実際の利害得失をば算外に置き、単に小を助け大を挫くの一事を壮快なりと非常に熱したるものも少なからざりしことならん」と評している。

このような日本側の独り善がりの義侠心に対して朝鮮側が少しも感謝の色がないばかりか、日本を厭う様子があるために「可愛さ余りて憎さ百倍」という感情が日本人の中に起きたという観察は、隣国に対する近親憎悪的感情の起こる原因を示していて興味深い。

日本人の朝鮮に対する義侠心という点では、「石光真清の手記」に現れる次の逸話をあげて置きたい。明治二十年（一八八七）、ド

イツ人メルレンドルフが清国の差し金で朝鮮に来て税関の管理を行い、また外交でも活動を行つていた時期のことである。石光の陸軍士官学校時代の同期生に朝鮮からの留学生、朴祐宏がいた。

また早く世を去つて今なお私の胸中に生きている同期生に朝鮮人朴祐宏君がいる。朴泳孝等の親日派に属する家柄で、この派から派遣留学生として送られてきた秀才であつた。朝鮮が弱小国で清国からは属国扱いを受け、ロシアからは侵略の脅威の下にあつたころである。彼は日曜、祭日には在京の同志を訪ねて教えを受けていたが、生まれつき才能もあり、多感な少年であつた彼は母国の困難を思つて胸中堪えられぬことが多かつたに違いない。ただ一人、校庭の池の端に或は土手にたたずんで思いに耽ることが多かつた。

同期生たちも彼の心中を察して常に慰めの言葉をかけていた。

「君は僕たちと同じように、学生として修養の時代だ、政変などに頭を悩ましてはいけぬ。日本だつていつ君の国と同じ境遇になるか判らないさ。清国とロシアの脅威を受けている点では少しも違わない。海を一つ隔てているだけの違いではないか。卒業後に地位を得てから決死の働きをすれば良いじゃないか」

こう言うと彼はうなずいて微笑するのであつたが胸中の苦惱は去らない様子であつた。幼年学校を終えて士官学校に転じたのは明治十九年九月だつた。翌年、明治二十年の三月のこと、メルレンドル



フという独逸人が政略上朝鮮に帰化して高官の地位に就き、不似合いな朝鮮服を来て徐福という大官と一緒に日本を訪れた。滞日中にこの二人が士官学校を参観したことがあった。その時、特に朴君を整理している全校生徒の前に呼び出して、激励の言葉を与えた。朝鮮使節が自分の国の留学生に激励の言葉を与えるのは当たり前のことであるが、朴君はその夜、寝台に伏して声をあげて泣いていた。

私たちは彼のまわりに集まって彼を抱き起こして、何故の悲しみであるかを問うたが答えなかった。考えて見れば、何故であるかを問うことさえが彼には堪えられない辱しめであったに違いない。独逸人が政府の高官に就いて日本との外交折衝に当り、自分を呼び出して衆人環視の中で激励の言葉を与える……同期生に対しても上官に対しても朝鮮人として忍び得ない侮辱を感じたに違いないのである。その日から、間もない四月の或日、校庭の桜が満開をやや過ぎて散り始めた日のことであった。午前中の学科を終えて中食のために食堂に集まったが朴君の姿が見えなかった。私たちは別に気にもせず各自の部屋に帰ったところ、朴君は寝台の上で小銃を咽喉部に当てたまま自殺を遂げていた。馳せ集まってきた同期生たちは立ちすくんで呆然とした。皆の胸に思い当たることが多かった。やがて啜り泣きの声が聞こえた。遺書も残されていたが、教官が持ち去って生徒には発表されなかった。<sup>(13)</sup>

ここでの、日本の陸軍士官学校生徒たちが朝鮮の留学生に対して抱いていた共感の源泉が端的に示されている。「清国とロシアの脅威を受けている点では少しも違わない」。従って、日清戦争で清国の脅威が取り除かれ、日露戦争でロシアの脅威が去れば、そうした共感は根拠を喪失するわけである。石光は大正時代に入っても、朝鮮の留学生を自宅に寄宿させ、朝鮮の独立を訴える冊子を配っていたというが、こうした人物は例外と言わねばならないだろう。しかし日清戦争のこの時期における日本の士官学校生徒達の朝鮮留学生に対する同情も、また真実であったと言わねばならない。そうした朝鮮の境遇に対する同情は、日清戦争の時点でもまだ存在はしていたのである。

#### 朝鮮の暴政……同情と侮蔑

朝鮮の状態が悪いという認識は、その境遇に対する同情を生むがまた、そのひどさに対する侮蔑も生む。釜山港が江華島条約で開港され、日本人が商売の為に訪れるようになると、その見聞が新聞紙上に載るようになるが、その代表として実業家大倉喜八郎のレポート（明治十年、一八七七）を挙げておこう。

朝鮮政府の無状なるさままた言語に絶したり、昨年の飢饉のごとき、人民の道路に餓死する者陸続として相望めども、官吏は恬とし

て見ざるがごとく、なおも例によりて暴政を行えり。人民はもとより無氣、無力なれば、艱苦を忍んで暴政に甘んじ、さらに竹槍蓆旗を掲ぎ出す程の氣力もなきものどもなれば、一人として官吏の暴虐を責むるの意なく、政府はかくの如き者と思ひてただ恐るること虎の如く、尊ぶこと鬼神の如し。ここに於て官吏は八道無事にして天下太平なりと云い、政府は堯天舜日、万民鼓腹の世なりと思えり。<sup>(14)</sup>

これはかなり遠慮のない言葉を使った批評であり、確かに朝鮮を見下しているきらいはあるが、いっぽう人民の苦難を目撃して義憤にかられているという趣もある。ところが同じ朝鮮の暴政を報告しても、それによって朝鮮が如何に駄目な国か、如何に朝鮮人は劣等な国民かを強調しようとしているものが、特に日清戦争のときには多いように思われる。『朝鮮詳報 日清戦争実記』（明治二十七年、一八九四）は松井若円という講師の口述を筆記したという形をとっており、大衆向けに日清戦争の経過を物語ったものであるが、さきに明治十五年、壬午軍乱について大衆向けと思われる「朝鮮變報録」を紹介したが、これに比べると実録としての質は相当に低いと云わねばならない。朝鮮の暴政を説明する部分を抜き出してみよう。

……年貢米を運送するを名とし年貢米の外に汽船の修繕費碇泊料運賃の差金まで取り立つるを初め人民の疾苦と云ふものは爪先ほど

も感じませんから若し右の上納を滞りましたるものあるときは片端から召し捕つて入牢を申し付け其の入牢中に本人か又は親類のものが代わつて右年貢を納めますれば直ちに放免しますけれども若し誰れも納め手のないときにはいつまでも牢に入れて置き永く囚獄の疾苦を感じさせますので尤も斯のやうなる飢饉同様の不作の年に年貢を不納致して永らく牢に入れ置くといへば我日本の如き監獄制にては貧乏人などの為に結句安心なもので都て衣物食物とも官より支給されず故心配といふことなどは少しもありませんけれども朝鮮に於きましてはなかなか左様な訳でございまして斯のやうな罪人が入牢中の衣物食物は悉く自費でございまして若しも当人が何時迄も其年貢課役を納めることが出来ませんで牢中に在るか又は親類などで代納を致さず食物の差し入れなどを致しませんければ当人は終に餓死するより外はなくなる始末それにまた朝鮮は日本と違ひ賄賂の盛んに行はれまする国である故偶々親類縁者が食物の差し入れを致しまするにも其れぞれ役人共に多分の賄賂を遣はさなければ本人の手元までは届かぬといふ有様にて今は早や実に見るも憫れなる境界恰ど赤子の手を絞めるやうな惨酷な世界と相成りました<sup>(15)</sup>

このような、朝鮮で誰かが監獄に入れられた場合は、その家族が食事の負担をしなければならぬ、という慣行は前から知られていた。たとえば、明治八年（一八七五）に出された佐田白茅「朝鮮聞

見録」には簡単に「獄ニ入ルル飲食ハ罪人ノ親類ヨリ送ルヨシ」と記されて、これに対する批評は加えられていない。この「朝鮮聞見録」では、朝鮮の風習が羅列的に記されて、それに対する価値判断は一切付されていない。これに比べると「日清戦争実録」のこの記述は日本の進んだ監獄制度に比べていかに朝鮮の制度が残酷で遅れているかということが強調されている。確かに監獄制度は「治外法権」を外国に撤廃させるために必要なことであつたから、日本としては模範監獄を造るなど、特に努力した項目だったので、それが旧態依然たる韓国の場合と比べて目立ったということがあるにもせよ、日本に比べて朝鮮がいかに遅れているか、ということがことさらに強調されているのである。

日清戦争に際して出された実録、朝鮮に対する報告は、こうした傾向が目立つ。たとえば、明治二十九年（一八九六）に出された大庭寛一「朝鮮論」は、かなり学問的な体裁をとつた詳細な朝鮮の行政に関する分析を行っているが、その記述の基調は、いかに現在の朝鮮の内政が頹廢し、官吏の綱紀が乱れ切っているかという態度で一貫している。この書では、特に地方行政の腐敗、本来は合理的な制度と思われるものが、地方官吏の腐敗ですべて民衆の搾取の手段となつてしまつてゐることを摘発して止まない。

元来、進上は貢献の類に非ざるを以て民人の之を納むるや必ず監

司に命して相当の代価を下付せしめたり然るに歲月を重ねるに従ひ此に亦貪心汚威を逞しふし竟に横斂暴征の弊を見るに至れり之を詳言すれば則ち監司は返償の金員を私して納者をして毫釐の利に浴さしめず而して進上の物種は之か上納を命するに当たりて定額の数倍を徴するに至れり<sup>16)</sup>

このような書き方からすると、朝鮮の官吏は一人残らず貪官汚吏であるかのように見えるのであるが、上のような事実が確かに存在するからと言って、すべての朝鮮の官吏がそうであるかのような書き方をしているのは、朝鮮に対して筆者が全面的に失望し、これはもう駄目だと匙を投じているか、或いは一定の政治目的に適合するように、意図的に朝鮮を否定的に描こうとしているかのどちらか、あるいはその両方であろう。

少数派に属するが、朝鮮の官吏の腐敗、横暴をいうが其の中にはまた優れた人物もあることを書き出そうとしているものに志良以染之助「朝鮮内乱始末」（明治二十七年）がある。たとえば東学党鎮圧のため任命された李元会について、次のように記している。

……李元会は曾て漢城の利軍たりし人にして韓人中には頗る活発且つ勇氣ある人物の由本年七十の高齡なりと豊饒たるかな<sup>17)</sup>

その当否は別として、活発、勇氣、豐饒など、人物を評するのに肯定的な言葉を連ねて、また一人一人を見分けて判断を下そうとしているその姿勢は評価して良いであろう。

### 東学党の評価

こうした「朝鮮内乱始末」の叙述態度は、その東学党に対する評価にも現れている。「朝鮮内乱始末第二篇」では東学党について次のように評している。

東学党は一種の革命党なり姑息偷安の朝鮮政府其のものより見るときは則ち一揆匪賊の類に過ぎざるべしと雖朝鮮の国家そのものよりして観来るときは実に一種の改革党たるべき性質を具備するなり(中略) 彼らは正しく吏権の圧政に反抗して決然勃興したるものにして情実打破を陣頭に翻へし君側の姦邪を一掃して妖雲怪霧を切り開き以て天日の昊々たるを庶幾するにいたりたるもの彼らの衷情むしろ大に憐れむべきものにあるに<sup>(18)</sup>あらずや

この言葉遣いを見ると漢文調を用いながら、恐らくは自由民権の流れをくむものであろう。しかし、アジア進出を掲げた東邦協会の出版になる「朝鮮論」においても、全体として朝鮮の改革にきわめて悲観的、否定的である中で、東学党に対する評価はやはり高いの

である。もちろん通俗的な日清戦争ものでは、東学党を単なる乱民、暴徒と扱うものもあるが、少なくともこの「朝鮮論」の東学党に対する見方はやはり朝鮮政府より、東学党にはるかに同情的である。

其宗制は頗る厳格にして其党衆は能く協和し勇あり義あり以て大事に当るに足れり是れ此の宗派の特色なり惟ふに百事因襲の弊をなすの今日に於て特色斬新の宗派を此土に生出し以て惰眠を警醒し以て風規の頹廢を挽回せんとするは豈一偉事に<sup>(19)</sup>あらずや

結局その東学党も不平無頼の徒と一緒にあって、討伐されてしまひ、積弊改善の功をなすことが出来なかった、と結論づけている。これは本書の朝鮮に対する否定的な見解に沿うよう叙述したものであるが、この著者はよほど東学党に魅かれるものを感じたようである。東学党が現在(一八九六年)討伐されて改善を行う状態にないのは、「有識者の挙げて痛惜に堪えざる所なり」と結んでいる。

### 検閲の問題

このように、日清戦争の時期に於ても、日本人の朝鮮に対する感情は、好悪入り交じった両義的なものだったのである。しかし全体として悪感情の方に大きく傾いていったことは間違いないであろう。このように同情と侮蔑が入り交じった日本人の朝鮮に対する感

情が、悪い方に大きく傾いていったのには、政府による言論の統制という観点をどうしても抜きにして語ることが出来ないであろう。

明治十五年（一八八二）壬午軍乱においては比較的自由だった朝鮮に関する言論が、厳しく統制されるようになるのは明治十七年（一八八四）の甲申政変の時である。このときこの政変に関して出版された本の数は少なく、<sup>(20)</sup>壬午軍乱の時は比較的正確な事実関係が報道されたのに対して、甲申政変については、事の真相は全く国民に知らされずに終わっている。

このような政府の報道統制は、日本人の朝鮮に関する観念を大きくねじ曲げたと思われるが、そのことの評価は今後の研究に譲りたい。ただ福沢諭吉が自由党関係の言論よりはよほど政府よりの論陣を張っていたにもかかわらず、政府の側に「時事新報」を停刊にしようとする企図のあることにたいして、それをとりやめるよう政府に求めた手紙の一節を引用して、当時の政府の言論抑圧ぶりを示すに止めたい。我々は、福沢諭吉の一見自由闊達と思われる論説のなかにも、政府の統制の跡を読み取らねばならないのである。

……昨夕路傍の噂を承り候に、老生関係の時事新報の義、内務より停止を命ぜらるべきやの趣、これが事実なら誠に驚人候次第、（中略）今回朝鮮の事変（甲申政変、筆者注）杯に就ては色々言ひ度事も有之候得共、実は政府の御都合を推察いたし、且は日本国の

ためを思ふて、時として心に思はぬ事までも記して事の跡を掩ひ候次第、然るに此時事新報が政府の御意に叶はずとすれば如何致して可然や、実に当惑の次第に御座候……（明治十八年一月二十一日、川村純義宛）<sup>(21)</sup>

#### 注

- (1) 渡辺文京編『絵入 朝鮮変報録』 広告舎 四頁 一八八二年
- (2) 同右 七頁
- (3) 中江兆民『三酔人経綸問答』 岩波文庫 二〇〇頁
- (4) 同右 二〇四頁
- (5) 『時事新報』 明治十五年三月二十八日
- (6) 『時事新報』 明治十五年十二月七日
- (7) 『時事新報』 明治十五年十二月七日
- (8) 『福沢諭吉全集』 十七卷 岩波書店 四五四頁
- (9) 『近時評論』 明治九年六月十日
- (10) 『時事新報』 明治十五年三月十一日
- (11) 前掲『福沢諭吉全集』 十六卷 三二七頁
- (12) 日本の名著『陸奥宗光』 中央公論社 八二頁
- (13) 石光真清『城下の人』 中公文庫 二〇七―二〇八頁
- (14) 『東京日日新聞』 明治十年七月十二日
- (15) 『朝鮮詳報 日清戦争実記』 松井若円口述 四一五頁 一八八四年
- (16) 大庭寛一『朝鮮論』 東邦協会 八三頁 一八九六年
- (17) 志良以染之助『朝鮮内乱始末』 巖々堂 六七頁 一八九四年

| 年号<br>(明治) | 西曆   | 全書目数 | 朝鮮関係<br>書目数 | 事件    |
|------------|------|------|-------------|-------|
| 一一         | 一八六八 | 七二   | 〇           |       |
| 一二         | 一八六九 | 三七二  | 〇           |       |
| 一三         | 一八七〇 | 四四七  | 〇           |       |
| 一四         | 一八七一 | 五〇二  | 〇           |       |
| 一五         | 一八七二 | 六〇六  | 〇           |       |
| 一六         | 一八七三 | 一一三八 | 一           |       |
| 一七         | 一八七四 | 一五四一 | 二           |       |
| 一八         | 一八七五 | 二〇〇六 | 三           |       |
| 一九         | 一八七六 | 二二六二 | 五           | 江華島条約 |
| 二〇         | 一八七七 | 二七八〇 | 〇           |       |
| 二一         | 一八七八 | 二九七九 | 三           |       |
| 二二         | 一八七九 | 三一九三 | 〇           |       |
| 二三         | 一八八〇 | 三三三〇 | 二           |       |
| 二四         | 一八八一 | 四〇九六 | 二           |       |
| 二五         | 一八八二 | 四五〇八 | 四九          | 壬午軍乱  |
| 二六         | 一八八三 | 四五八九 | 二           |       |
| 二七         | 一八八四 | 四二二四 | 一           | 甲申政変  |
| 二八         | 一八八五 | 三九五七 | 三           |       |
| 二九         | 一八八六 | 三九八三 | 〇           |       |
| 三〇         | 一八八七 | 四二六六 | 一           |       |
| 三一         | 一八八八 | 四一九八 | 二           |       |

(18) 志良以染之助『朝鮮内乱始末第二篇』 駁々堂 二頁

(19) 前掲『朝鮮論』 一一二二頁

(20) 国会図書館所蔵の明治三十年までの文献数と、「朝鮮」と冠された本の数の総計は以下のようなになる。壬午軍乱時、五十近い本が出ているのに対して、甲申政変（一八八四年十二月）の直後の年、一八八五年には、僅かに三である。

(21) 前掲『福沢諭吉全集』十七卷 七一九頁

|    |      |      |   |       |
|----|------|------|---|-------|
| 二二 | 一八八九 | 三〇四七 | 〇 |       |
| 二三 | 一八九〇 | 三七八〇 | 〇 |       |
| 二四 | 一八九一 | 三九一〇 | 〇 |       |
| 二五 | 一八九二 | 四〇一五 | 三 |       |
| 二六 | 一八九三 | 四四五五 | 六 |       |
| 二七 | 一八九四 | 四八〇七 | 四 | 東学党の乱 |
| 二八 | 一八九五 | 三〇七六 | 五 |       |
| 二九 | 一八九六 | 二三六〇 | 二 |       |
| 三〇 | 一八九七 | 二七〇四 | 〇 | 俄館播遷  |